国際茶道塾通信第二号　　2021 年 3 月 15 日

ijcee 副理事長
国際茶道塾塾長
山口和加子

塾生の皆様、こんにちは。国際茶道塾通信の第二号をお届けします。

引鶴の孤高の翼広げけり　　稲畑汀子
鶴引くや甲斐の山々平伏し　鷹羽狩行

三月の季語に『引き鶴』があります。日本で越冬した鶴が群れを引き連れて北へ帰っていく事を指した言葉ですが、お茶の世界でも、茶碗の意匠に取り入れられたり、茶杓の銘に使われたりします。

尾形光琳には『群鶴図屏風』という、19 羽の鶴が、まるで屏風の端から中央に向かって歩いてくるようにも見える六曲一双の屏風があります。この屏風はワシントンのスミソニアン協会が管理・運営をしているフーリア美術館が所蔵していますが、Canon と京都文化協会が進める綴プロジェクトによって精密に復元されたものが、東京都美術館に寄贈されているので、目にした人も多いと思います。

『引鶴』と聞くと、引き摺る、と連想する人もいらっしゃるかもしれません。引き摺らない事、一心に飛び続ける事、また、飛べない時には、目指す所に向かって歩み続ける事が大事だと思います。鶴は、飛び立つ時・歩み始める時を知っています。仲間と一緒に羽を広げて、飛翔します。その姿には、雪をいただく山々もひれ伏さざるを得ないのでしょう。

『茶の湯をば　心に染めて眼にかけず耳をひそめて聞く事もなし』（利休百首：第 91）

情報が溢れるこの頃ですが、皆様と一心に国際茶道を続けられる幸せをかみしめております。緊急事態宣言が二度も発出され、心も乱れがちですが、目指す所をしっかり捉えて、皆様とご一緒に、力を合わせて羽ばたいていきたいと存じます。